

人間よ 真面目になれ。

私たちは 天才がほしい。

偉大なる天才は 我たちが目覚めることによつて生れる！

(大正十年二月)

□おお、

恵まれたる若人よ！

栄光輝く同胞よ！

姑息の夢からさめ、悪弊の衣を脱ぎ、

人間の怠惰がつくつた虚偽の快樂から解放されて、

若人たちは雄々しく奮いたつた。

失われたる正義を恢復せんがために、血は燃え、肉は躍る。

虐げられたる悲しき者のために血涙流れ、

自我実現 〓 人生向上、君国擁護の汗は流れる。

人類のために捧げる尊き祈り。

純真なるが故に持つ一路精進の辛酸は我らが法悦である。

真如絶対に摂取抱擁さるべき我らが生命は、正義に斃れるを厭わない。

我が倒れたる屍は、新しき若人よ、それを土台に進んで行け。

屍一個も超人(ニーチェの)を作るの礎だ。

黎明が近づいた。

眠っている哀れな若者をゆりおこせ。

全ての若者たちにあの人生行路の波濤の試練を受けさせ、

人生浄化の愛の勝利者たらしめ、

天才現出の努力をさせよう。

若者よ立て！

大地の上に、ドシンと。

(二月三日夜)

## 巻頭の叫び

純真なるが故に与えられたる、善人のみの持つ祝福されたる、生の苦しみ。

あなたは苦しいでしょう。あなたの自覚が明かになればなるだけ、苦しむのがほんとうです。私たちは、善人が常に順当に恵まれた話には飽くほど、善人の血の河を見ています。悪の力は刹那に強く常に純真な人を苦しめます。我欲ばかり強い人の群の中で、あなたばかりが正しく行けば、あなたは衣服まではがれるでしょう。横着者の中に立つては、あなたばかりが働く様でしょう。人と事を約束しては、何時も人を待つ間の苦しさ馬鹿らしさばかり味わうでしょう。万人の敵にもされるでしょう。現実の醜さと光明の輝きとの間のあまりに隔たっていることに、悲しみあせるでしょう。よろめき倒れ、倒れては立ち、あなたが向上の一路を息たえだえに進むことは、苦しいでしょう。だが、しかし、その苦しみは祝福された苦しみです。善人にのみ味わうことの出来る苦しみです。霊の奥底に感謝の湧く苦しみです。

正義は永遠の勝利！ 私たちは如何に苦しくても、その信条に動きはありません。正しき者を苦しめる鬼どもは、一時の栄華や勝利の酒に酔ったとて、それは、彼ら自身の悪をもつて亡ぶべき悲しい喜びである。正しきが故に持つその苦しさは、正義の殿堂、愛の樂園を建設<sup>うちた</sup>すべき久遠に流るべき尊い力である。

純真なるあなたが持つその苦しさは、やがてあなたが目覚むる時、やがてあなたが救われた時、それは一切が、真実のうれしさに、感謝にかわるだろう。

山の奥に一人立つとも、都会の真ただ中に立つとも、慰さめ得ざる苦しみをもつとも、それがあなたの真実なるが故にもつ苦しみなら、祝福されたる苦しみだ。その苦しみこそ、如何なる時にも持ち得る、真善に進み得る。たとえ苦しみつ死するとも、来るべき時代の浄化の基だ。おおそれ純真なれ。

## 没我の境

心ころころ汝の心は一時もじつとしていない。一列の刺激を受け流して、心の乱れない、動かない相を取り得ることは難しいことだ。

神の前にひれふす時にも、仏の前に額づく時にも、葬式の読経の時にも、汝の心はキョロキョロする。汝の心は汝の周りの小さい出来ごとにも、一陣の風にも、一片の落葉にも、恐れたり、震えたりする。取りとめることの出来ない汝の心よ！ かくして汝は永遠の迷妄に入るのだ。

静座せよ！ 坐禅せよ！ けれど汝は深山にかくれて座禅するにはあまりに多くの忙しい仕事がある。一日に二度静座せよ、けれど静座しない時の心を何とする。(静座して体の健康は得られよう。とはいえ、静座の本尊も流感にかかり、岡田さんも急に死んだ。) おお汝には、永遠にその迷いから出ることは許されないか。情欲の眼を閉じ、色食の門をふさいで、心霊の実相をうかがうことが次の悟か。

汝よ、目を一転せよ。空気枕の一方を押せば一方がふくれる。そんなことをやめよ。体を摺すりこぎ子木でおさえることをやめよ。しかして天の一方に目を馳せて、汝と感応する光を仰げ。汝は汝の心を握らんとして苦しむことより、汝は汝が針の端を見つめて心の統一を得ようとあせることより、開放されて、汝が、汝の誠を捧げて、汝の心霊が、彼の偉大なる愛に帰依し、信賴し、合致することによりて救われよ。

汝が、汝の四周より目をはなちて、かの理想を考えつつ、恍惚として、汝自身を忘れて、努力精進に突入する時、そこに没我の汝があるではないか。汝が偉大なる自然の美に接する時、汝が一日の仕事に専心なる時、汝が快心の笑いをもらして書物に読みふける時、汝が人を愛し救わんと祈る時、汝が非痛な逆境のどん底に立つ時、全ては汝を没我の境に導くではないか。かくして得たる汝の経験は、汝自身全我の統一ではないか。修養ではないか。

□ 無知な親が子を生んだ。

無知な親が子を教育すると言った。

「何騒動する！ 静かにせんか。」

子供は外に出てよその子供と一緒にあって、自由に飛んだりねたりして、着物を破って家に帰った。

「何故着物を破った。外に出てはならん。勉強せい。」

子は机にすがって絵を書きはじめた。

「馬鹿！ 何している、字を書かないか。」

子供は本をひろげた。けれど心の中では、小山の上の友達の兵隊ごっこや来るべきお正月の楽しい予想にふけていた。親は安心している。

□ 坊は何に

「おお坊や、お前は誰がえらいと思う。」

「先生やお父様や、そして大将や。」

「そうだね、お前は何になりたい?。」

「大将に。」

「どうしたらなれる。」

「先生やお父様の言うこときいて勉強するの。」

「そうか。先生は何とおつしやった。」

「うちできつと復習せよと。」

「そうでしょう。では坊は立派な人になるのだから。勉強なさいね。……………あ、よくしましたね。一つ二つ問うて見ましょう。……………ああよく知っていますね。外に出て 夕方まで遊んでおいで。」

□ 禅寺に入らなくても

子供の日誌を開いて見ます。「△△先生が日の暮れた雪の中を患者の家にビショビショおいでる。私も成人したらあの様に……」あの雪汗道のその中に……………。

朝おきて暗い内に湯がわいた。牛も飼います。掃除もします。裏の小溝の汚い物も流した。弟の着物も一心不乱に思ったより早く出来上り、借りた書物も返しました。一日はほんとに忙しかった。日誌もつけた。金銭出納も一厘の違いもありません。書物読んだら九時が来た。楽しい一日だけど寝ましようか。明日がぞくぞくう4れしくなる。

□ 忙しければこそその中に。

私が夕方故郷の峠にかかると、年をひろったお爺さん、僕がいるとも知らないで「南無阿弥陀仏く、やれやれうれしや。」一本一本、木が割れる。お爺さん、幸ですね。何で若いお方の自然主義とやら、現実何とやらの半解の新思想とやらに、その味が、その斧の響がわかりましようぞや。おかえりなさい、日が暮れますよ。

寄宿舎の門限が何時だろうが、その壁が如何にお城の様に高かろうが、規則が如何にむずかしかろうが、あなたに問題にはなりませんわね。それを越して酒の巷に走ろうの何のと思う暇もないほど、代数も今日出た宿題もやつておいた。国元の父へも手紙を出した。英語も明日のところの自信があります。買った書物も五十頁、靴の手入れまでしておいた。

俺は今書を読んでおったのか。拳も握った、汗も出た。涙が流れた。ああ、あの間に二時間たつたか。ああ、これが僕の描いた絵だろうか。小便もつかえておった。そうだもう一時だ。昼食することすら忘れておったか。

歩く道も禅堂なら、台所も、教室も、山の中も、書物の中も、持つ筆も、食べる一椀の飯の中にも、感謝の伴う禅がある。

「きり結ぶ 太刀のしたこそ 地獄なれ

ふみこんで見よ あとは極楽」

電光石火、劍の下にも泰山もゆるがぬ没我がある。自己の全てを捧げる時、投げつける時、考えては知れない没我がわかる。

## 忍びぎる心

□ 私たちを皆殺す

蛙が温かい春の池に遊んでいる。子供がそれに石を投げる。石があたれば頭がくだけて一匹づつ死ぬる。

「もしもし、子供よ、石を投げてくれるな。」

「何、わしは石をなげて遊んでいるのだ。」

「あなたには小さい遊び事でも、その小さい遊び事が私たちを皆殺す。」

鉄砲を背に今日一日を山に遊ぶ。人間のして悪いことではない。いい遊び事だろ。けれどその一発一発が美しい鳥を一羽づつ殺す。生命を奪って得られる小さな遊びよ。私は他人のしているのが悪いとは思わない。とめようとも思わない。ただ私には出来ない。小さい魚が針で口の内をやぶっている。私はそれを見て楽しむことは出来ない。僕は弱いのだ。けれど僕はそれを悲しいとは思わない。私は楽しみ得ないのだ。私の道徳以上の世界なのだ。私は美しいヤマドリが血を出して断末魔の苦しみをしているのを見るよりも、子供たちが蟻に飯粒を引かすのを見るのが楽しいのだ。

□ 森で鳴かせたい

鶯もろに羽毛がぬけてふくれた目白が、籠の中で逃げよう逃げようと飛びまわる。それが癖になったか、上から下、下から上に同じことをくり返す。人はそれを見て喜んでいる。人間は何故あの目白が、青い青い若葉の中で、ツリーツリーと歌っているのを聞いて楽しまない。谷から谷に、梅をたづねる鶯に耳をかさない。籠に入れて、軒にさげる人間の勝手よ。けれど悪いとは言わない。私に出来ないだけなのだ。籠の鳥の悲哀、大自然の内に自由にさえざる鳥の歓び、私は森で鳴かせたい。

□ 私は肉を食う、魚を食う。しかも一羽の鳥すら殺し得ない。何という矛盾である。けれどそれは私一人の心ではあるまい。

その昔、支那の齊の宜王は孟子に言った。「徳如何なれば立派な王となることか出来ようか。」孟子は「民を愛し、仁政をほどこし、民の心を得て王となるに過ぎたこととはありません。」と問いに答えた。「私の如きものにそれが出来るか。」「出来ますとも。」「なぜか。」孟子は言った。「王よあなたが御殿の上に立っていられると、その時その下を牛をひいて通った者がありました。その時王様は、「その牛はどこにどうする」と尋ねられた。「鐘にちぬるために殺すのです。」聞いて王様は「お舎け舎け、わしは罪なくして死地につれて行かれるそのこくそくとして見るのを見るにしのびぬ。」「それではちぬることをやめましようか。」「と問えば「止めなくてよい。その牛のかわりに羊を使え。」と申されたそうです。」「そのお心です。そのお心こそ以て王たるべきお心です。百姓たちが、王様は欲が深いと言おうが、王様はまだ殺される牛は見て

も、羊は見ないので。牛を見て、その死を哀れむ心即ち王たるべき心です。」と。私は孟子の心がうなづかれる。

□ 神石牛もこれからか

比婆、神石あたりからは神石牛を産する。神石牛を持つてゐることは農家の誇りである。強健で美しいばかりでない。柔和である、温順である。貴相さえ見える。私は比婆神石二郡の人が牛肉を食い得ないのを知つてゐる。牛肉さえ食い得ないその心、神石牛の生れた原因ではあるまいか。(土質や氣候の關係もあるが)

蛇を石で殺して快哉を叫ぶ子供の心は、他日人を殺すの小さき芽であり、親不孝の種である。

峠にかかつた汗ばんだ馬車馬が大きな棒でたたかれる。その一つ一つは日本の馬が劣等にされる原因である。

□ 忍びざる心、人である

見るにしのびず、聞くにしのびず、言うにしのびず、為すにしのびない心、即ち人の心である。崇高な愛も、人類救済の願ひも、歓喜も平和も感謝も、忍びない心がある。

人々よ、殺伐になれて、忍びない心の根を枯らすな。

あなた一人の存在が

神よ仏よ

あなたに善を求める自由が与えられたことを信じ、私が内的生命の実現にのみ生きることが善たることを免し、自分はこれ特殊の個性を有する小さな命なれど、普遍一貫愛の流れは特殊の我となりてのみ表れ得ることを信ずる時、我は神であり仏である。

我々は永久を信ずる。生命の不朽を信ずる。私は、一生向上を続ける一生ではない。百年千年一劫永劫不断の向上を続ける。私一人の一日のよどみは、一日の向上のよどみである、足踏みである。あなた一人の不真面目は地獄への悪魔への後戻りである。

如何に人生に役立つか

自分のことをちつとも考えないで、全く人のために自分を犠牲にするということ、通俗的には言えるにしても、真実主観的に考えた時、犠牲を善とするなれば、他人のために自分を殺すことは、悲しい犠牲ではなくて、自分を棄てることによつて、同時に私の第一義的欲の満足である。故に、私たちには感謝がなくてはならぬ。

私たちが自分の心を欺かないで、自分の本心の満足を願う時、それは即ち人類への、社会への、国家への奉仕であつて、私の満足が社会の満足でなければならぬ。

私一人の存在が如何に他の人たちから感謝の涙をそそがれているだろう。私もあるなにも何だつていい、あなたがいることが、人の感謝の種だつたらいい。妻一人にすら感謝せられない人間、夫一人にすら感謝されない人間、友人にすら有難がられない人間、何という哀れさだろうか。

人生行路の先頭か

目覚めない人間の群れが、

何かしら意味はなくても、

人間の群れが進む方に、引きづられてゆく。

五人の群れ、十人の群れ、百人の群れ、万人の群れ。

私よ、先頭に立て、

そして、彼の群れに光明をあたえよ、

自覚の鐘の音を聞かせよ、

汝よ、先頭に立て、

そして、彼らを、厳粛なる正義の祭壇の前に、温かい春霞の野に、導け。

彼らの先頭に立つことには、

汝の自覚と勇気と努力以外に何物をも要しない。

女でも、子供でも、貧者でも、よい。

野の花の如き、天使の如き、快活なる少女は、

貧しき父と母との生活の中心ではないか。



「働きましよう。みんな話をやめて面白く働きましよう。」  
この一言、彼女たち五人を動かしたではないか。  
疲れた夫も妻によつて力を得、  
育てられる子供は母の愛の懷に、  
老いた姑は嫁の親切に泣かれる時、  
女でも一家十人の先頭ではないか。  
「女よ、先頭に立て、しかして、人生幸福の鍵を握れ。」

## 二月を迎えて

□ 十一日 全ての学校で式が開かれるだろう。神武天皇の御創業、日本帝国建設の第一日が祝せられる。私たちは心から祝したい。静かに、二千五百八十一年前、私たちの祖先が、神武天皇を御中心に、国家の基を立てて、国祖の神々様をお祭りしたその歡喜を思う時、そして又、我が国の悠久に対する信仰を感謝する時、何でこの日が祝せないでいられようぞ。紀元節が平気であり、天長節の日を忘れる国民のふえる時、それは私たち国民の愈々緊張しなければならぬ時だ。

この日は又、私たち国民が、明治大帝の御仁慈によつて、憲法を得た記念日である。日本国民ほど憲法の有難味を知らぬ国民はあるまい。立憲政治こそは、人間が、自由への、道徳への出発である。立憲政治は国民の自覚と教育とによつて進歩する。村会議員等の選挙に、ある地方では、村内の有権者がある候補者に割あてて書かすことによつて、その派の人を多く出そうとすることがあるそうだ。まるで、神聖な一票も、選挙権もあつたものではない。自分の自由意志によつて、一票が使われる時が来ねば、自治体もけつこうな自治体だ。

青年が戸主になつた時は、何にもさまたげられないで、自由に一票を使え。

□ 十二日 今から百二十二年前の今日、北米合衆国は、ロッキー山のように、ミシシッピ河の様に、偉大な大人格、リンカーンを生んだ。私は、リンカーンを崇拜する。愛の人である。リンカーンの平和よ、温謙よ、公平無私よ。彼は全世界を同じ人間たる黒奴を奴隷として使う重い罪を犯すことから救つた。

開放されたアメリカ人たちは、永遠に、自由な平和な陽光を仰ぐことの出来るのをリンカーンに感謝するだろう。

□ 二十二日 今日合衆国の国祖ワシントンの生れた日である。彼は十三州の自由を愛する人たちの輿望を負うて立つた。米国では、ワシントン以上の功績を何人にもゆるさぬとか。彼は凡人であつた。誠意ある偉大な凡人であつた。ほんとの人間であつた。彼の誠意は、永遠に、米国人の崇敬の中心である。誠意という言葉は平凡である。けれど、この平凡な誠意は永遠の偉大である。

□ 二十五日 今日天神祭である。菅原道真は、我が民族の生んだほんとの人間である。神である。知と徳の神である。藤原氏の全盛時代、藤原氏でなければ人でないこの時代に、醍醐天皇や宇多天皇の御信任を蒙つて、右大臣の高きにのぼつたからとて、私は崇敬の至情は捧げない。

右大臣の高きから、流れて筑紫のはてのわび住い、昨日にかわる今日の身の上も、恨とも思わず、天子様を忘れ得ず、天皇から戴いた御衣を捧げて天皇を慕い奉る、その至情、天子様の恩寵を絶対に信じて、腸を断つ思いに泣いた愛の生活(畏れど)。庭の梅にまで別れを惜んだその人間らしさ。私は、窓に流れ入る月光の下に、痩せ衰え

た涙の道真を思う時、大地に伏して拝みたい様な尊敬と、私の心をなげつけて、飛びつきたいほどの慕しきを感じる。

### あまりに惜しき人の命よ

□ 若い女が二三人、若い男や四十位の男が七八人、酒を飲んで乱痴気騒ぎに、時の移るの知らない。若い女は酒をつぐ、時々男から卑しい猥らな笑談を言われては、キヤツキヤツ笑いこらげて喜んでんでいる。齒の浮く様な歌を歌って、男たちにほめられて、得意になつてゐる。若い女の生命よ。酒の相手に、男の甘心を買うための卑しい俗歌を歌つてゐるには、あまりに惜しい生命である。女たちよ、人生にひろげられた永遠の広野は見えないか。その酒徳利の陰にひそむ大きな虚は見えないか、その若い生命が明日でも死の手にさらわれることを考えないか。

□ 「食うて飲んで、死ねたらいいのだ。わしは随分と苦しんだ。長い間放浪の旅もした。わしは時に道徳者らしくもなつた。けれど、生きてゐるのみがわしに与えられた唯一のものだ。わしは食つて酒を飲んで、死ねたら本望だ」

何という卑怯だ。それではあまりに惜しい人の生命。

□ 「わしは死にたい。わしほど不幸なものはない。ついで、幸運が来たことがない。する仕事もなす事業も失敗続きだ。とてもわしには何も出来ない。いつそ死んだがいい。わしは行きづまつた。」と、それではあまりに惜しい生命だ。君の成功の第一歩はその苦しい失敗の中にあることを知らないか。大海を走つた船が、島のならば内海に入った。島と島との間に入つて、もう海はつきたと思つた。けれどその小さい島12を回れ。そこには又果てしもない大海がある。島と島との間で、もうこれでおしまいだ、と思つてはならない。

□ 「わしはあの男が出世してもちつとも不思議はない。わたしでもあの男の様に、金があつて、親がしてくれたら出来るのだ」と言つて遊んでゐる。それでは若い男があまりに惜しい生命ではないか。

□ 「私もそれがよいと思ひますが、とても周囲がゆるしません。まあこんなつまらないことをして毎日暮してゐます」と。体もおちつけられず、飛びもせず。これでは、これではと、若い日の一日一日が消えて行く。それではあまりに惜しい生命。

□ 「仕方がないじゃありませんの。わしほ来たくはなかつたけれど、兄や姉が、どうしてもこの家に嫁入りせよと言うから泣き泣き来たのです。けれども子供が出来てしまいました。」子供に何とお詫びをします。徹底的に愛しもせず、と言つて、兄の意見にそむくだけの自信もない。かくして、次から次と子供を生む。それではあまりに惜しい生命よ。

□ 「いいじゃありませんか。悪いのはお前の自性だ。悪いからこそ、そのままのお助けじゃ。わずかこの世ばかりの宿、わしは、先生、この世はあきらめました。さらに

こうしようと思いません。まあ朝寝もし、夕飯酒の一ぱいのみ、出来る様にやるのが上々じゃ。この世に望みはもちませんわい。」結構なご信心じゃ。それでは信心者たちがあまりに惜しい人間の生命よ。

□ 人々よ、もう一度考えてくれ。それではあまりに惜しい生命だ。あなたにでなければ出来ない仕事が残っている。あなたにはあなたの世界がある。

## 後記

□ 同胞よ。皆様が心から出して下さった毎月のお金は、毎月の紙代や郵税を払って、少しづつ残って行く様になりました。そして、それは、毎月毎月貯蓄されています。少しづつでも、百円二百円と出来た時、私たちの年来の希望たる、新しい活字で印刷された光明は皆様の手に入ることでしょう。尊い寄附のお金は、力一ぱい始末して、五年後でも十年後でも、出来る日まで、楽しみつつ待っています。

□ 同胞よ。毎号二頁を「同胞親睦室」に提供します。明らかに本名を出して、その叫びを、その消息を、その活動を、その感謝を、その不平を、その求めを、赤裸々にお出し下さい。但しなるべく百字以内の精練された文章にて。

## 光明団支部設立について

□ 団員十名以上ある一地方を支部とします。

□ 広島市内外七十名の団員諸君、広島支部設立発起者たちが協力しておられますが、その開会の期日と場所との通知をうけたら、一人も残らず出席ください。